



指導者

八島 秀樹

山鼻南家の食卓

札幌市立山鼻南小学校 4年2組 男子 13名

女子 17名

計 30名

地球は狭くなったといわれる。なぜなら、通信・交通手段の発達によって世界が身近になったこと、企業活動の活性化や旅行者の増加などで異文化に触れることが多くなってきたからである。事実、子供たちの渡航体験も私たちの頃とは比べものにならない。また、英語を習う子供も多い。しかし、子供たちにとって海外は本当に身近なものなのだろうか。

確かに海外は夢をはせる対象ではなく、手の届きうるものになってきた。将来の夢を聞いても大リーガーを目指すなど日本の枠にとらわれない子供も出てきている。しかし、実際にクラスに外国人が来たこともなく、普段の生活の中で外国人とかわかることもない。また、テロや戦争、人権問題など情報としては知っていても、それは知識としてのことであり自分事ではない。生活としては世界との距離は縮まってはいないのである。

1. 単元について

「山鼻南家の食卓」は「うらわざ」や「おばあちゃんの知恵」などの生活の知恵を子供たちが調べることで、先人の暮らしの工夫や、身の回りにあるものの意外な効用を知る。そこから、調べる力、物事をさまざまな方向から見ようとする力を育てることをねらった単元である。

本単元では、子供たちが調べた「うらわざ」や「おばあちゃんの知恵」を外国人に紹介することで、日本の文化や伝統を自らの一部としていこうとする単元である。

また、自分のものとした「うらわざ」を外国人と交流することで、伝える、理解するというコミュニケーションの基本のやりとりを体験すること、言葉の壁を互いに協力して乗り越えること、互いの文化を認め尊重する態度を通して「異文化理解力」「共生の心」を醸成し、「コミュニケーション能力」を高めていくことを目標としている。

本時を含む10時間の単元構成と平行して、山鼻南小学校では「うらわざ」「おばあちゃんの知恵」を調べ、追究していく活動が行われている。

本単元「山鼻南家の食卓」と並行して行われている「山鼻南家の食卓」は互い補完する関係にある。「山鼻南家の食卓」で調べた「うらわざ」を外国人に紹介することで、さらなるこだわりを生む。そのこだわりがさらなる追究意欲を生み、「うらわざ」を深めていく。外国の「うらわざ」とおして、自国との共通点や相違点を知り、生活や文化の違いに気づく。それぞれの活動が互いの興味、意欲

を深めていく関係になる。

子供たちは、本單元ではじめて出会う外国人に対して思いを膨らませている。自分達の調べた「うらわざ」についてもこだわりをもっている。それは、相手に伝えたいという思いにつながり、伝えたるための方法を試行錯誤してきた。そのためにいくつかの子供の必要とする英語表現も学んできた。子供たちはこの單元を通して相手とつながる快体験をし、コミュニケーション能力を高めていくこととなる。

2, 研究の視点にかかわって

○かかわりあう姿 本時においてかかわりあう姿は「ALTに対してかかわり合う姿」、そしてALTと交流するために「自分たちが協力する姿」である。

言葉の通じないALTとのかかわりを支える要素は三つある。

- 1, どうしても伝えたいという「うらわざ」に対しての強い思い。…これにはこだわりをもてるほどの深い追究と子供が感じる意外性が大切である。
- 2, 何とか伝えることができるという自信。…これは本時までの体験が大切である。あらゆる方法を試した体験。伝えるために持っている手段の多様性。そして、自分たちが必要と考え用意した英語表現である。
- 3, 子供たち同士が協力し合えること。…いかなる用意をしても、子供にとって不安は残る。しかし、困ったときに助け合える安心感が子供の心に一歩踏み出す勇気をもたらす。

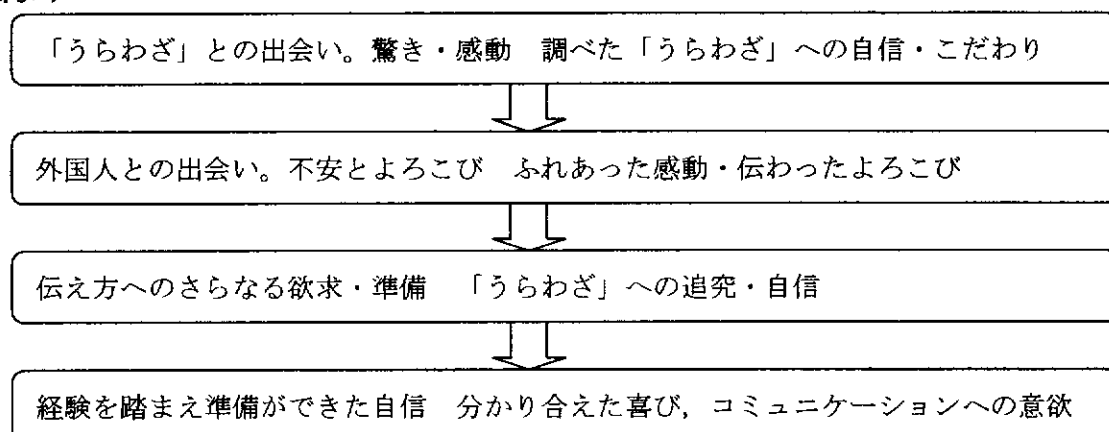
これらの要素が子供たちの中に形成され積極的なかかわりあう姿を期待して活動を構成した。

○活動の価値

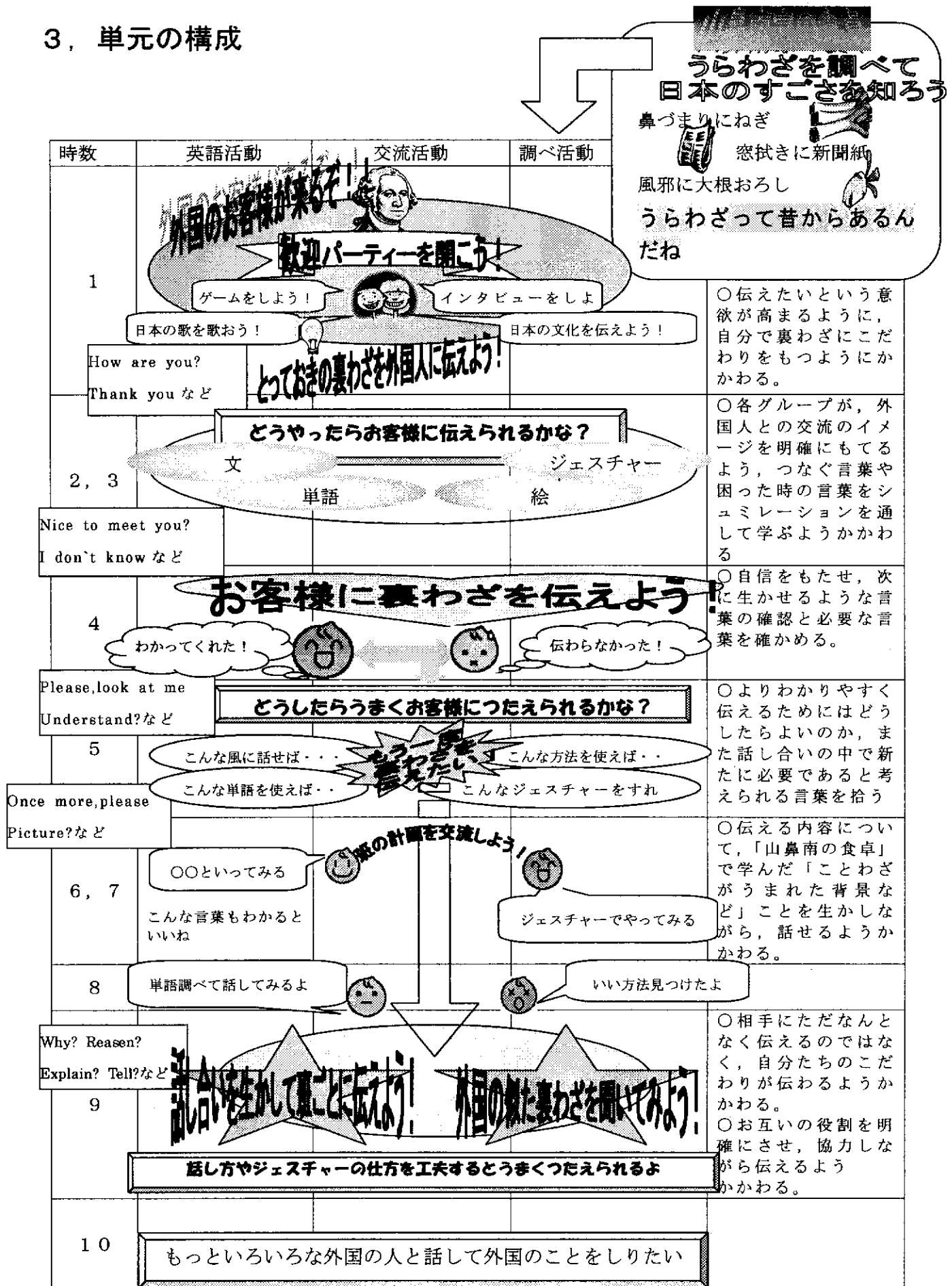
子供たちは、言葉の壁を乗り越えて自分たちの思いを伝えていく。これは、かなりの困難を乗り越えなければならないが、そのための力は「ぼくたちの日本に昔から伝わる知恵を教えるんだ」という強い思いである。自分たちが体験した「うらわざ」との出会いによる驚きや感動を味あわせてあげたい。そして、外国の「うらわざ」を知ること自分たちの知る「うらわざ」をもっと深めたい、広げたいという思いである。

そして、「自分たちの感動を教えることができた」「相手の伝えようとしていたことがわかった」「たくさん話し合えて楽しかった」という言葉が子供にとっての活動の価値を伝える言葉であるといえる。

○意欲の高まり



3. 単元の構成



4. 本時のねらい

子供たちが自ら問題を発見し、考え、確かな取り組みを通して解決していく授業の構築

○自分たちのこだわりのある「うらわざ」を伝えようとする中で、葛藤が生まれ問題を生む

子供たちは、調べてきた「うらわざ」の中から、こだわりのある「うらわざ」を伝えようとする。こだわりをもっているが故に何とか伝えようと、意欲的に活動し、相手にかかわる。異文化を持つ相手を理解するためには、言語が通じ合うことが一番早道であるが、子供たちにとってそれは難しい。そこで、何とか伝えようといろいろな方法を駆使しながらコミュニケーションをしようとするのである。

子供たちは、単元の前半で一度異文化をもつ相手に「うらわざ」を伝える活動をしている。友達と協力しながら何とか自分たちの思いを伝えようとするが、伝えたいことがうまく伝わらなかったり、この言葉さえあればもっとうまく伝わったのという体験をしている。この経験が、新たな問題をうみ、それを解決したいという意欲につながるのである。

そこで、本時では、前回のかかわりから学んだことを生かしながら、自分たちの思いや「うらわざ」を伝える活動を行う。そして、問題を解決しようと思惑錯誤するのである。

前回の学びを生かしながら活動する子供たちは、自分の考えや思いを伝える中で、何とか伝わったという達成感、成就感を感じながらも、かかわればかかわるほど新たな問題にぶつかるのである。異文化を持つ相手だからこそ、理解すればするほど新たな問題が生まれたり、もっと話したいという欲求がうまれるのである。

○様々な方法を用いて、コミュニケーションをしようとする中で、活動に価値を見出すことができる。

適度な抵抗感の中で問題意識をもって活動する子供たちは、限られた単語のみでは伝えることができないことを実感している。

そこで、いろいろな方法、例えば、絵を使ってみたり、ジェスチャーを工夫したり、または新たな言葉を用意したりしてかかわろうとする。

一度、異文化を持つ相手とかかわっているからこそ、自分たちの思いを伝えるためには「何が大切なのか」「どうしたらききだせるのか」グループで工夫している。

子供たちは、既習経験を生かしながら、自分たちのやり方やかかわりあい、「こうすればできるんだ」「この言葉がとても相手を知るためにはとてもよかった」などと実感を持った学びを自分たちで創っていく。

そして、相手を認めながら自分たちとの違いを実感したり、共通点を見出したりしながら、「もっと話したい」「もっと知りたい」「言葉がわからなくても伝え合うことができるんだ」と活動に価値を見出していくのである。

問題を解決するために友達と協力したり、既習経験を生かしたりしながら、追求していく楽しさ、達成感や成就感を味わうことで、子供たちは新たな問題を発見し、意欲を持続しながら追求活動を続けていくのである。

5. 本時の目標

- ・ 様々な方法を用いて、自分たちの考えを表現しながらゲストティーチャーとのかかわりをもととする
- ・ ゲストティーチャーの伝えようとすることを協力しながら理解しようとかかわる
- ・ 言葉や文化が違う人とかかわり合いの中から、伝え合うことの楽しさを実感することができる

6. 本時の展開

前時までの子供の姿 子供たちは、自分たちのこだわりのある生活の知恵（裏わざ）をどのようにALTに伝えたらよいか話し合い、実際にALTに伝える活動を班ごとに行っている。その後、自分たちの伝え方で何がよかったか改善すべき点は何か、次はどのようにしたらよいかを検証している。ジェスチャー、単語、文など必要なものをそろえ、よりわかりやすく伝えるための準備をし、計画を練っている。その計画がどのようにになっているのかお互いのグループごとに交流しあっている。



子どもの活動			教師のかかわり
英語活動	交流活動	調べ活動	
お客様に裏わざを伝えよう! 知ってる単語や前回の体験から必要だと感じた単語で説明してみよう! 裏わざを実際に体験してもらうために、つなぐ言葉を大切にしよう 実物を使ったり、絵を使って説明しよう! 身振り手振りも上手に活用しよう 挨拶, 自己紹介 Nice to meet you My name is ○○ Where come from? きっかけ, お礼 Thank you You are welcome Excuse me 新しい言葉を使ったら、すごくいい反応が返ってきたよ! だから、もっと話したくなったよ 相手の裏わざを聞き出そう! ・似ているうらわざはあるのかな? ・きつとなにか裏わざがあるに違いない もつとたくさん伝え合いたいな!			○大切な単語の確認とねらいが明確になるようかかわる。 ○前回の活動を想起させながら、自信をもって活動できるよう意欲を喚起する。 ○お互いに協力してみんなで伝えることができるよう役割をしっかりと果たすようかかわる。 ○伝え合う中で、うまく伝えられなかったり、どうにもならないグループに積極的にかかわる。 わかるまで繰り返し聞くことで、いろいろな工夫をしながら教えてくれてなんとか理解することができたよ ○伝え合う中で、キーになる言葉を拾ったり他のグループのよさを伝えたりして、深まりのある交流になるようかかわる。

7. 評価規準

- ・ 裏わざに対してこだわりをもち、前回の改善点やキーになる言葉を生かしながら、相手にわかりやすく伝えようとする。
- ・ 相手の国の裏わざを、つなぐ言葉やジェスチャーを織り交ぜながら、自分の役割をしっかりと果たし、理解しようとする。